

からしだね

日々のみことばの默想と、主日礼拝の準備に……

2026.2.16-2.22

2.16
月曜日

「そこで、イエスがもう一度両手をその目に当てられると、よく見えてきていやされ、何でもはっきり見えるようになった。」(マコ 8:25) ●一度目の不完全な癒しは、弟子たちの靈的盲目さを象徴していると解釈される。弟子たちや盲目の人は一度に、イエスに変えられたのではなく徐々に変えられていった。私たちクリスチヤンも、主との長い歩みの中で、ゆっくりと変容させられてゆく。その中で私たちは自分がいつまで経っても変わらないと思うかもしれない。しかし、その歩みは着実に主の御手の中で前進し、キリストに似るものへと変えられていっているのである。

2.17
火曜日

「『わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。』」(マコ 8:34) ●私たちに先立って、キリストが十字架に架かり、私たちの罪と罰を代わりに背負ってくださった。このことへの喜びが、私たちに自らの罪や汚さに向き合い、その十字架を背負う勇気と力を与える。もし、この主の言葉が厳しい言葉に聞こえても、大丈夫である。なぜなら、「わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いから」(マタ 11:30)と主が言ってくださるからである。

2.18
水曜日

「『はっきり言っておく。ここに一緒にいる人々の中には、神の国が力にあふれて現れるのを見るまでは、決して死なない者がいる。』」(マコ 9:1) ●「『神の王国』とは超越的な別世界を指すというより、神の支配が新しい形でこの世界に突入するという意味」(山口、P116) すなわち、神の王国はそれぞれの人生の内で身近なところに「突入」し実現するという側面があるのである。それをどのように知ることができるか。「神の言葉」が語られ、その力が私たちの心と生を捕らえて離さないと感じるときにそれを知ることができる。

| | |
|-------------|---|
| 2.19 木曜日 | <p>「なお見ていると、王座が据えられ『日の老いたる者』がそこに座した。その衣は雪のように白く、その白髪は清らかな羊の毛のようであった。」(ダニ 7:9) ●この世界の初めからおられる神の栄光は、白く輝く衣、純粋な羊毛のような髪であると語られる。神の威光は人間の想像力を圧倒し、神秘に満ちている。しかし、この神の神秘を私たちはキリストに目を向け、聞くことで知ることができる。この世界で最も美しいもの、それはキリストその人である。</p> |
| 2.20 金曜日 | <p>「『わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである。』」(マタ 5:17) ●イエスは山上でモーセとエリヤと語り合った(マコ 9:2-)。彼らはそれぞれ律法と預言を代表する人物であり、その成就についてイエスと語り合ったのかもしれない。イエスは、それまでの律法を新しいものに変えた。それは私たちを奴隸にする養育係としての律法から、私たちを自由にするイエス・キリストという新しい契約・律法である。</p> |
| 2.21 土曜日 | <p>「アロンとイスラエルの人々がすべてモーセを見ると、なんと、彼の顔の肌は光を放っていた。彼らは恐れて近づけなかつた…」(出エジ 34:30) ●神の栄光を人間は直視することはできない。たとえそれが、モーセの顔に反射した光であってもである。モーセがその顔を隠して人々に近づいた様に、旧約において神は多くの場合「隠れ」ている。この覆いを取り去ったのが、ほかでもないイエス・キリストである。</p> |
| 2.22 日曜日 | <p>「イエスの姿が彼らの目の前で変わり、服は真っ白に輝き、この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬほど白くなった。」(マコ 9:2-3) ●ダニエル書 7 章で預言された神としての姿がここに明らかになる。キリストの白き栄光は、私たちの罪や汚れを雪のように白く洗い流す。(詩 51:9) そこには、十字架において、私たちの汚れをすべて身に受けて下さったキリストの憐れみがあるのである。</p> |